

現代の国語科教育では、テキストを精確に読み解いて情報を受け取るだけでなく、受け取った情報の価値を判断し、自分の考えを筋道立てて組み立てる批判的思考力の育成が重視されている。本授業でも、中学校で学んだ「走れメロス」という物語の再読を契機として自分の考えを作り上げる、批判的読解が目指された。本授業の提案は多岐にわたるが、三点にしぼって注目した点を述べたい。

第一は、「演出」に着目したことである。メロスが「勇者」であるというイメージは、語りや物語の展開によって作られている。どのような「演出」がイメージを作り上げるかを叙述にかえて読み解くことで、テキストを批判的に読むときの起点が設定されている。第二は、「群衆」という観点を導入したことである。「群衆」は一見物語の背景に過ぎないが、メロスを「勇者」に見せているのは民を救ったという事実であり、群衆からの喝采である。しかし、誰かが処刑されることを予期していたはずの群衆が、メロスの帰還に立ち会ってなぜ簡単に喝采を挙げられるのか。もし私たちがメロスの物語に立ち会うとしたら、それは群衆の一人としてであろう。そのとき、何を考えるのか。道徳的・感情的になりがちな「走れメロス」の評価を問い直し、自分事として物語を捉え直すことが、本授業の眼目であった。こうした、「書きぶり」への着目、自分事としての課題設定、自分の考えの相対化といった授業設計は、批判的に読む力の育成を目指す学習の手がかりとなるだろう。

第三は、授業進行にPCのスライドを活用したことである。「群衆は何を期待して刑場にきたのか」「群衆はなぜメロス万歳ではなく王様万歳と叫んだのか」など、授業中には興味深い問いが多く提示された。こうした問いを、スライドを用いて手際よく提示することで、多くの課題を学習者と共有できた。いっぽうで、スライドがあることで、生徒が考えを作る時間が十分に確保できなかった感もある。問いをしぼり、考える時間や交流の時間を確保することは、PCを使うときの留意点であろう。

批判的読解の授業は、今後さらに求められるだろう。そのとき、どのようなことを考えさせればよいか。批判的読解の授業作りにおいて留意すべき事を多く考えさせていただけた授業であった。